

辻真先

殺人の国



Daiwa Novels

アリスの国の殺人

1981年4月30日 第1版第1刷発行

1986年4月1日 新装版第1刷発行

1988年3月10日 新装版第3刷発行

著者——辻 真先

発行者——大和和明

発行所——大和書房

東京都文京区関口1-33-4 〒112

電話番号(203)4511

振替 東京6-64227

印刷所——平河工業社

製本所——ナショナル製本

装幀——高麗隆彦

装画——辰巳四郎

©1981 Masaki Tsuji Printed in Japan

ISBN 4-479-56005-X

落丁本・乱丁本はお取替します

辻真先

殺人の国





大和書房
定価1000円

ISBN4-479-56005-X C0393 ¥1000E

アリスの国の殺人

辻真先



大和書房

アリスの国の殺人□目次
アリスの国の殺人□目次

だれがアリスと結婚するの? ⑬

第I章

第二章 密字

密室殺人

第II章

志闘054
25

鬼編 第一章

५१
॥ श्रीगणेशाय नमः ॥

第2章
女と男の歴史 ⑦

女と男の歴史 ⑦

第III章

アリスの花聳たすめ

103

大型パーティの趣旨⑬

第3章

⑬ 追われる者の心
⑭ 追いつく者の心
⑮ 追いつく者の心
⑯ 追いつく者の心
⑰ 追いつく者の心
⑱ 追いつく者の心
⑲ 追いつく者の心
⑳ 追いつく者の心
㉑ 追いつく者の心
㉒ 追いつく者の心
㉓ 追いつく者の心
㉔ 追いつく者の心
㉕ 追いつく者の心
㉖ 追いつく者の心
㉗ 追いつく者の心
㉘ 追いつく者の心
㉙ 追いつく者の心
㉚ 追いつく者の心
㉛ 追いつく者の心
㉜ 追いつく者の心
㉝ 追いつく者の心
㉞ 追いつく者の心
㉟ 追いつく者の心
㊱ 追いつく者の心
㊲ 追いつく者の心
㊳ 追いつく者の心
㊴ 追いつく者の心
㊵ 追いつく者の心
㊶ 追いつく者の心
㊷ 追いつく者の心
㊸ 追いつく者の心
㊹ 追いつく者の心
㊺ 追いつく者の心
㊻ 追いつく者の心
㊼ 追いつく者の心
㊽ 追いつく者の心
㊾ 追いつく者の心
㊿ 追いつく者の心

① 追いつく者の心
② 追いつく者の心
③ 追いつく者の心
④ 追いつく者の心
⑤ 追いつく者の心
⑥ 追いつく者の心
⑦ 追いつく者の心
⑧ 追いつく者の心
⑨ 追いつく者の心
⑩ 追いつく者の心
⑪ 追いつく者の心
⑫ 追いつく者の心
⑬ 追いつく者の心
⑭ 追いつく者の心
⑮ 追いつく者の心
⑯ 追いつく者の心
⑰ 追いつく者の心
⑱ 追いつく者の心
⑲ 追いつく者の心
⑳ 追いつく者の心
㉑ 追いつく者の心
㉒ 追いつく者の心
㉓ 追いつく者の心
㉔ 追いつく者の心
㉕ 追いつく者の心
㉖ 追いつく者の心
㉗ 追いつく者の心
㉘ 追いつく者の心
㉙ 追いつく者の心
㉚ 追いつく者の心
㉛ 追いつく者の心
㉜ 追いつく者の心
㉝ 追いつく者の心
㉞ 追いつく者の心
㉟ 追いつく者の心
㊱ 追いつく者の心
㊲ 追いつく者の心
㊳ 追いつく者の心
㊴ 追いつく者の心
㊵ 追いつく者の心
㊶ 追いつく者の心
㊷ 追いつく者の心
㊸ 追いつく者の心
㊹ 追いつく者の心
㊺ 追いつく者の心
㊻ 追いつく者の心
㊼ 追いつく者の心
㊽ 追いつく者の心
㊾ 追いつく者の心
㊿ 追いつく者の心

第V章

アリスの国の殺人

アリスのくにのさつじん
リリカルなお嘶から転じ
スリル駄洒落を綴りつつ
のりまくってみたいのさ
くしんのギャグと殺人の
にせアリスものがたりに
のんきな作者は白々しく
さまにならないCM用の
つまらん文句を考えマス
じけんも題もとんぼ返り
んじつさのにくのスリア

第 I 章

だれがアリスと結婚するの？
オレはアリスと結婚するの？

そのとき、綿畑克二は歩いていました。

歩くというこの動作、年収・納税額の如何にかかわらずだれでもやってのけている単純な反復アクションではありますが、よく考えてみると、どうしてひとすじ縄でゆく動きではありません。たとえば克二が、右足から歩を進めるつもりであったとしましょうか。左の軸足がかれの全体重を支えているあいだ、右足は地上 x センチの空間から、地表にむかっておろされようとします。当然、かれの足はその途中——たとえば $x/2$ によってあらわされる、中間の一点を通らねばなりません。また、その点と地表のあいだに横たわる中点、 $x/4$ センチを通過する必要があるのも、自明の理です。もちろん、その点と地表のあいだに存在する $x/8$ センチの位置をも通ります。さらに $x/16$ センチの点を……ということになり、以下無限にくりかえします。無限に分割可能な、宇宙空間にも比すべき巨大な距離を、有限時間内に踏みこえるなんて。

信じ難い奇蹟をやすやすとやってのけている二本の足に、克二はひそかな敬意をはらったものでした。えらいもんだ、おれの足は。ころびもせずちゃんとおれの上半身を運んでいってくれる。

……待てよ。それにしても足のやつ、おれをどこへ連れてゆくつもりだろう。ここで克二は、やつと前方に立つ人物に気づきました。黒いガウンのようなものを着て、首に十字架をぶら下げています。よく光る金色です。18金でしょうか。もしあれが24金だとしたら、ちょっとした値うちものです。まるで神父みたいな男だなと、克二は思いました。

神父さんといっても、むしろ人間です。人間は神の子であるのに、なぜ人間に神の父がいるのか、とすると神母はどこにおいでなのでしょう。いずれにせよ、神父さんだって、ときには大衆食堂で一杯四百五十円のチャーシューメンをすすり、乗車率二百パーセントの国電でもまれていらっしやるかもしれないのに、幸か不幸か克二はお目にかかったことがありません。

かりに正面の人物が、まさしく神父であったとすると、いったいいかなる理由があつて、克二はその前へ進み出ようとしているのか。すくなくともおれはクリスチャンではない、とかれは思いました。その自分が、多少でも宗教的雰囲気にはひたる機会があるとするとするなら、

A バレンタイン・デー

B クリスマス

C 結婚式

D 葬式

の四つのケースくらいではないでしょうか。

そこまで考えたとき、克二の耳もとでくすつとかわゆく笑う声が聞こえました。すてきに耳ざわ